

相葉裕樹&熊谷彩春インタビュー

「ミュージカルに馴染みのない方たちにも楽しさを届けたい」

——相葉さんは船橋市、熊谷さんは佐倉市のご出身ですが、どのような環境で育ちましたか？

相葉 家の近くに梨園や森があり、梨を買って食べたり昆虫を採って遊んだりしていました。幼い頃はヒーローが大好きで、俳優になってから『侍戦隊シンケンジャー』への出演が決まった時は夢が叶って嬉しかったですね。

熊谷 自然が多いおおらかな環境で、登下校中に毎日歌って踊ったり、のびのびと育つことができました。自宅の近くの田んぼで発声練習代わりに歌っていると、畑にいるおばあちゃんが褒めてくれるんです(笑)。私の友達もミュージカルが好きで、小学生の時は自分たちで脚本を書いたミュージカルを下駄箱の昇降口で披露していました。

——ミュージカルの魅力を知り、舞台に立つようになったきっかけは？

相葉 学生の頃はクラスを中心に立つタイプではなく、みんなの注目を集める存在への漠然とした憧れから芸能界に興味を持つようになったんです。最初は歌や踊りのパフォーマーを目指し、ダンススクールで出会った仲間と3人でダンスボーカルユニットを組んでストリートライブを行っていました。ジュノン・スーパーボーイ・コンテストで特別賞を受賞し事務所に入所してから俳優としてオーディションを受け、ミュージカル『テニスの王子様』への出演が決まりました。デビューから間もなく代表作になるような作品と出会い、この作品があるからこそ俳優としてやっていけたと思っています。

熊谷 両親が「話すよりも歌うことが先だったんじゃないか」と言うほど、幼い頃から歌や踊りが大好きでした。2歳から父の転勤でロンドンに住んでいた頃、初めて観劇したミュージカルにすっかりハマリ、「私がやりたいのはこれだ」と目標がピタリ定まったんです。それからは毎日自宅のソファを舞台にミュージカルごっこをするようになり、一度も夢が変わることはありませんでした。



——ミュージカルの舞台に立つために努力した経験や大変だったことがあれば教えてください。

相葉 『テニスの王子様』に出演した当時は舞台の常識を一切知らず、同世代の共演者たちと部活のノリでステージに熱くのめり込み、大人に叱られながら成長した時期でした。根拠のない自信と「大人になめられたくない」という反骨精神を抱き、「認められたい」「売りたい」と一生懸命もがいていましたね。『テニスの王子様』を卒業してストレート・プレイ（歌唱を含まない演劇）に出始めてから、もっと演技がうまくなりたいと思うようになりました。

熊谷 ただ頑張っただけで仕事に就けるわけではない厳しい世界なので、できることは何でもしようとバレエや歌やミュージカルの教室に通いました。やりたいことをすべてやらせてくれた両親には感謝しています。中学生の時に父の転勤で移ったマレーシアでは、ブロードウェイで歌唱指導を務める先生のワークショップに参加する機会にも恵まれました。その時に先生から「ミュージカル女優になるなら、基礎としてクラシックを学んだ方がいい」とアドバイスされ、帰国後はクラシックの音楽を集中的に習いました。呼吸の仕方や声の流し方などクラシックの基礎がしっかり糧になったので、習ってよかったと思います。

——これまでのキャリアで転機となった出来事がありますか？

相葉 2015年に『ラ・カージュ・オ・フォール 籠の中の道化たち』で鹿賀丈史さんと市村正親さんと共演させていただき、それまで映像作品での活躍を目指していましたが、この共演をきっかけにミュージカル界の第一線を走るお二人のようになりたいと思いました。そして「帝国劇場の舞台に立つ」という目標を掲げ、その2年後に『レ・ミゼラブル』で実現できました。それからは、自分は何も変わっていないのに周りの目が変わり、ミュージカル俳優として認められた気がします。

熊谷 高校2年生の頃、将来ミュージカルの世界に行けるかどうか分からないので、音大に進学すべきか海外に留学するか進路に悩んでいました。そんな中、バークリー音楽大学の夏期講習に参加して同世代の仲間たちが夢を追っている姿に刺激を受け、さらにワークショップで指導を受けた憧れの女優クリスティ・アルトメアにも「あなたなら大丈夫」と背中を押され、帰国後すぐに東宝芸能のオーディションに応募しました。そしてその直後に『レ・ミゼラブル』のオーディションにも合格することができました。



——これまで特に印象に残っている舞台はありますか？

相葉 石丸幹二さんと共演したミュージカル『蜘蛛女のキス』ですね。石丸さんが女性的な雰囲気同性的愛者役なのに対して、僕は筋骨隆々の革命家役ということもあり、大先輩に対してひるまずに立ち向かいました。牢獄の中に石丸さんと僕だけがいるというワンシチュエーションでバチバチに演技合戦ができて、とてもいい勉強になったと思います。他にも、ミュージカル界の大先輩で天才でもある中川晃教さんとWキャストと一緒に戦ったオリジナルミュージカル『CROSS ROAD～悪魔のヴァイオリニスト パガニーニ』や、二人芝居で台詞の量が多く、稽古中に点滴を打つなど死にそうな思いで乗り越えた『ダブル・トラブル』など、この1~2年のチャレンジングな舞台も印象に残っています。

熊谷 初めてヒロインを演じさせていただいた『笑う男』です。盲目の少女という役で私にとってチャレンジングでしたが、とても勉強になりました。また、蜷川組の素晴らしい役者さんたちが揃った『天保十二年のシェイクスピア』で自分の芝居力のなさを痛感していた時、『笑う男』で共演した先輩の俳優に「彩春にはベテランが喉から手が出るほど欲しい若さがある。もっと彩春らしくのびのび演じたらいいんだよ」と言われ、一気に肩の力が抜けました。そういう意味でも私にとって思い出に残る作品です。

——舞台に立つ時に心がけていることは？

相葉 これは演技についても言えることですが、とにかく準備を怠らないよう心がけています。実は歌うことが苦手で、ダンスボーカルユニットでも僕だけ歌わせてもらえず、これまで舞台上で生きていくために歌のスキルを磨き続けてきました。演技においても、台詞が曖昧だったり役柄を作り込めていないと舞台上で不安になるので、人一倍時間をかけて準備しています。

熊谷 映画などの映像作品にはない、舞台ならではの生のエネルギーをお客様に与えたいと思っています。また、ミュージカルに馴染みのない方が違和感を覚えないよう、語るように歌うことを心がけています。

——今後演じてみたい役や俳優としての目標があれば教えてください。

相葉 王子様的な2枚目の役を演じることが多いのですが、40代になってからも俳優として戦っていけるように、実年齢より上の年齢の役もできるような俳優になりたいですね。

熊谷 私は演じることが大好きで、全部の役をやりたいくらいです。今後も一生お芝居を続けていき、千葉でも公演を行える女優になりたいと思います。

——3月12日『ちば文化芸術シンポジウム&ミュージカル・コンサート』への出演を控えていますが、どのような心境ですか？

相葉 千葉でステージに立つのは初めてで「やっと呼んでくれたか」という気持ちです。千葉にまつわる公演に呼んでいただけるようになったかと思うと光栄ですね。

熊谷 地元の千葉で舞台上に立つことはずっと目標の一つで、千葉県文化会館は今回が初めてですが、千葉県南総文化ホールで『リトル・ゾンビガール』の公演に出演したことがあり、その時は感慨深いものがありました。

——公演への意気込みをお聞かせください。

相葉 千葉出身仲間『レ・ミゼラブル』仲間の熊谷さんと共演しますが、彼女は本当に歌がうまく、あの年代のミュージカル女優ではトップクラスじゃないでしょうか。お兄さんとしては足を引っ張らないように（笑）、ミュージカルのことをあまり知らない方も口ずさめるようなナンバーを中心に、お客様が楽しめるステージを一緒に作りたいと思います。

熊谷 相葉さんとは『レ・ミゼラブル』で共演しましたが、同じ曲をデュエットしたことがないので、一緒に歌えることが今から楽しみです。芝居力はもちろんエネルギーも華もある相葉さんと2人でお客さんを曲の世界に連れて行けるよう、歌とお芝居の両面で引き込みたいと思います。

相葉裕樹プロフィール

千葉県船橋市出身。俳優。ミュージカル『テニスの王子様』不二周助役で初舞台。その後、『レ・ミゼラブル』アンジョルラス役、『アナスタシア』ディミトリ役など数々の名作ミュージカルに出演。映画、海外ドラマ、アニメの吹替など声優としても活躍。

熊谷彩春プロフィール

千葉県佐倉市出身。俳優。幼少期に子役として劇団四季の舞台に立つ。ミュージカル『レ・ミゼラブル』のオーディションを受け、史上最年少でコゼット役に抜擢。NHK みんなのうたミュージカル『リトル・ゾンビガール』や『東京ラブストーリー』等出演。23年4月『ジプシー』出演予定。